三種教相事（三種教相）

正嘉元年　三六歳

一に根性の融不融の相。　種熟脱を論ぜず

- 方便品、譬喩品等の意なり
  寂滅道場を以て元始と為す
- 爾前の得道を許す
  - 華厳・法華
    初後の仏慧、円頓の義斉し等なり
    此の妙彼の妙、妙義殊なること無し等なり
  - 迹門
    - 相待妙　麁妙を判ず　与釈
      - 約数　前三を麁と為し後一を妙と為す
      - 約部　前四味を麁と為し醍醐を妙と為す
    - 絶待妙　麁を開して妙を顕はす　奪釈
      - 爾前の得道を許さず

二に化導の始終不始終の相。　爾前の得道を許さざるなり

- 化城喩品
  三千塵点
  大通を以て元始と為し、余教を以て種と為さず
- 迹門
  - 種は大通
    熟は中間・今日の四味
    脱は法華
- 量品の意なり
  五百塵点
  久遠を以て元始と為す。世々番々の成道なり
- 本門
  - 種は久遠
    熟は中間・今日の四味
    脱は法華

三に師弟の遠近不遠近の相。大通今日の成道を破すなり

玄の一に云はく「教相に三と為す。一に根性の融不融の相、二に化導の始終不始終の相、三に

- 寂滅道場を以て元始と為す
  一に根性の融不融の相
  種熟脱を論ぜず
- 華厳　阿含　方等　般若　法華
  各得道有り

師弟の遠近不遠近の相」文。
籤の一に云はく「前の両意は迹門に約し、後の一意は本門に約す」文。
又云はく「初めの根性の中に二と為す。初めには八教を明して以て昔を弁じ、次には今経を明して以て妙を顕はす」文。

- 華厳の円
  - 別は麁、円は妙
  - 相待妙、麁妙を判ず
  - 前三を麁と為し後一を妙と為す
- 方等の円
  - 相対妙、麁妙を判ず
  - 前二を麁と為し後一を妙と為す
- 般若の円
  - 相待妙、麁妙を判ず
  - 相待妙は、麁妙を判ず
- 法華の円
  - 絶待妙は、麁を開し妙を顕はす
  - 約教　横待　前三を麁と為し後一を妙と為す
- 相待妙
  - 約部　縦待　前四味を麁と為し醍醐を妙と為す

当分は相待妙
跨節は絶待妙
籤の一に云はく「又今の文の諸義は、凡そ一々の科、皆先づ四教に約して以て麁妙を判ずるときは、則ち前三を麁と為し後一を妙と為す。次に五味に約して以て麁妙を判ずるときは、則ち前四味を麁と為し醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして、直ちに一語を指して便ち法華は華厳より劣れりと謂へるは幾許の誤りぞや、幾許の誤りぞや」文。籤の二に云はく「当分は一代に通じ、今に於て便ち相待を成ず。跨節は唯今経に在り、仏意は今に適むるに非ざるなり」文。
玄の二に云はく「此の経は唯二妙を論ず。更に非待非絶の文無し」文。
籤の二に云はく「若し相待の中には展転して妙を明かせども前の麁猶存せり。今絶待を論ずるに、前の諸麁を絶して形待すべき無し」文。

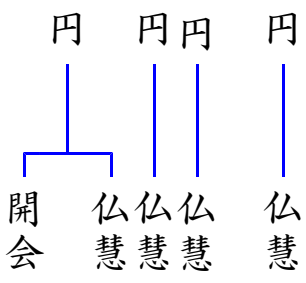
- 華厳の円
  - 心法妙
  - 衆生妙
  - 仏法妙
- 方等の円
  - 心法妙
  - 衆生妙
  - 仏法妙
- 般若の円
  - 心法妙
  - 衆生妙
  - 仏法妙
- 法華の円
  - 心法妙
  - 衆生妙
  - 仏法妙

相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
相待妙
絶待妙
絶待妙
絶待妙

玄の二に云はく「是の両妙を用て上の三法を妙ならしむ。衆生の法に亦二妙

を具足す。之を称して妙と為す。仏法心法に亦二妙を具足す。之を称して妙と為す」文。

籤の二に云はく「二妙妙上三法とは、三妙の法華に在って方に妙と称することを得ることを明かさんと欲す。故に二妙を須ひて以て三法を妙ならしむ。故に諸味の中に、円融有りと雖も全く二妙無し」文。

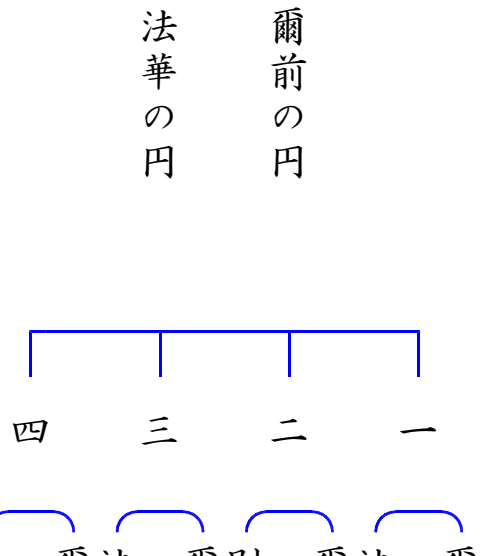


玄の二に云はく「此の妙彼の妙、妙義殊なること無し」文。

玄の十に云はく「初後の仏慧、円頓の義斉し」文。

文の句の五に云はく「今の如きは始めの如し。始めの如きは今の如し。二無く異無し」文。

弘の五に云はく「惑者は未だ見ず、尚華厳を指す。唯華厳円頓の名を知って、而も彼の部の兼帯の説に昧し。全く法華絶待の意を失ひ、妙教独顕の能を貶挫す。迹本二文を験して五時の説を検するに円極謬らず、何ぞ疑ひを致すことを須ひん」文。



籤の三に云はく「若し祇但四教の中の円を判じて之を名づけて妙と為ば、諸経に皆是くの如きの円の義有り。何ぞ妙と称せざらん。故に須く復た更に部に約し味に約し、方に今の経の教円部円を顕はす。若し教に約せずんば則ち教の妙なることを知らず。若し味に約せずんば部の妙なることを知らず」と。

玄の三に云はく「当に知るべし、勝鬘の所説は次第を説いて浅きより深きに至れり。歴別して未だ融せず。乃ち是無量の四諦の中の無作なり。是発心畢竟二不別の無作に非ず」文。

籤の三に云はく「此は是別教教道の説。初発心畢竟二不別に非ず」文。

二に化導の始終不始終の相

玄の一に云はく「又異をいはゞ余教は機に当たって物を益す。如来施化の意を説かず。此の経には仏の教を設けたまふ元始巧みに衆生の為に頓・漸・不定・顕密の種子を作し、中間に頓・漸の五味を以て調伏し長養して之を成熟

熟し、漸次に品頓
後漸よ品
巧
云
む
彼
の
な
即
益
ざ
経
愚
云
若
は
華
心
宝
徴
本
門
来
皆
非
法
身
地
鑑
豈
云
難
聞
は
脱
し
ず
開
顕
極
し
会
已
は
円
冥
ば
し
偏
て
円
事
の
理
名
を
に
絶
す
。
華
厳
・
方
等
・
般
若
の
偏
円
に
対
し
明
か
す
既
論
す
れ
に
ず
ど
も
言
故
て
の
に
便
知
ち
大
道
成
四
十
余
年
し
て
現
に
し
て
方
て
今
日
の
大
小
の
世
界
塵
数
鑑
み
た
の
菩
薩
、
は
ん
や
」
文
。
又
大
中
説
と
て
長
て
故
通
一
世
す
。
に
に
物
並
び
に
益
に
脱
し
、
次
、
と
に
具
に
並
び
に
経
解
に
下中、又
頓
に並
不は
退
云
に
し
く
に
漸
寄
く
が
種
の
五
味
に
と
の
し
る
こ
を
経
雖
迷
中
は
に
余
と
以
て
番
て
之
と
々
異
に
を
明
か
な
息
度
脱
す
る
ま
す
る
こ
と
大
勢
を
威
猛
に
三
か
す
。
に
に
並
び
に
益
に
脱
し
、
と
に
具
に
並
び
に
経
解
に
説び・
正
ふ
又
明
は
に
び
に
及
び
下
に
に
と
の
し
る
故
に
こ
は
為
大
及
り
の
し
、
に
於
と
く
と
を
び
下
中
、
又
故
並
て
を
「
云
退
不
は
に
並
頓
相
身
を
地
い
に
び
は
明
又
ふ
し
定
正
説
び
・
る
ら
於
ば
の
法
と
。
に
於
と
く
と
を
び
下
中
、
又
ず
て
、
義
三
を
地
い
に
び
は
明
又
ふ
し
定
正
説
び
・
ず
て
、
義
三
を
地
い
に
び
は
明
又
ふ
し
定
正
説
び
・
十
六
文
。
若
相
蔵
兼
に
は
更
に
是
か
以
。
て
に
し
く
に
漸
王
。
若
相
蔵
兼
に
は
更
に
是
か
以
。
て
に
し
く
に
漸
子
弘
し
違
の
ね
機
ゞ
に
及
種
す
よ
所
初
寄
く
が
種
の
五
の
四
無
帰
た
を
、
涌
び
な
。
り
以
め
す
今
如
す
五
の
三
念
し
戒
り
鑑
即
出
番
り
故
下
に
に
と
の
し
る
味
に
処
」
羯
」
羯
文
み
ち
を
々
。
に
は
中
迷
雖
経
。
こ
を
生
縁
に
せ
云
の
文
る
信
引
不
此
度
今
間
ふ
も
の
余
と
以
の
結
に
ず
磨
文
る
信
引
不
此
度
今
間
ふ
も
の
余
と
以
の
近
に
ざ
は
聞
。
悉
。
こ
解
い
息
に
脱
世
に
、
意
経
番
て
之
王
。
の
声
く
聞
し
慧
又
く
止
と
の
て
と
於
と
に
七
故
余
を
と
々
之
子
昔
聞
か
を
云
成
の
久
中
迷
云
て
云
復
教
に
経
明
異
に
を
弘
聞
の
禁
ず
初
取
は
就
三
し
に
の
ふ
は
た
を
復
を
か
な
息
度
し
の
か
ず
戒
ざ
め
く
せ
に
き
、
文
。
是
な
七
受
更
以
す
る
ま
脱
す
る
こ
と
大
言
。
か
せ
は
る
く
せ
に
き
、
文
。
是
な
七
受
更
以
す
る
ま
脱
す
る
こ
と
大
む
。
ず
ん
に
に
く
ず
云
こ
と
又
を
此
熟
り
教
く
に
て
。
な
ず
す
る
こ
と
大
ふ
は
に
は
、
小
を
具
す
て
こ
「
初
取
は
遠
。
は
と
を
指
す
。
窓
・
中
と
云
へ
り
。
な
り
。
る
こ
と
大
時
機
本
無
所
謂
久
遠
に
誰
か
禁
戒
の
具
不
具
を
や
論
ぜ
ん
や
全
く
未
だ
曾
由
云
文
。
又
云
文
。
又
云
文
。
又

に形へんが為に、往法華絶待の縁を結び、今は円珠に寄せて絶理を談ず」文。

又云はく「法譬二周の得益の徒は往日結縁の輩に非ざること莫し」文。

三に師弟の遠近不遠近の相

玄の一に云はく「又衆経には咸く道樹にして師の実智始めて満じ、道樹を起って始めて権智を施すと云へり。今経には師の権実道樹の前に在りて久々に已に満ぜりと明かす。諸経には二乗の弟子実智に入ることを得ず、亦権智を施すこと能はずと明かす。今経には弟子実に入ること甚だ久しく、亦先より解して権を行ぜんことを明かす。又衆経には尚道樹の前の師と弟子と近々の権実を論ぜず、況んや復た遠々をや。今経には道樹の前の権実長遠なることを明かす。補処世界を数ふるに知らず、況んや其の塵数をや。経に云はく、昔未だ曾て説かざる所、今皆当に聞くことを得べし。怒懃に称歎すること良に所以有るなり。当に知るべし、此の経は諸経に異なることを」文。籤の一に云はく「次に今経の下は今経の一体権実久々に已に満ずることを明かす。迹中の三千界の墨点すら尚已に久と為す、況んや今の本の中の五百億の塵界をや。故に久々と云ふ」文。

又一節已に久し、況んや節々相望するをや。故に久々と云ふ。